
さあ、花道に立ちましょう

リレー小説

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さあ、花道に立ちましょう

【Nコード】

N2084J

【作者名】

リレー小説

【あらすじ】

それは、小さい小さい高校の、小さい小さい演劇部のお話。汀の所属する演劇部は、来年で廃部になってしまう。そんな決まってしまうた決定事項に汀はある決断を下す。その判断とは、最後の大会で優勝すること。最後の夏休みが幕を開けた。

*****これは、桃蓮様、逆さまの蝶様、BJ様のリレー小説です。文章力、書き方が違います。ご了承下さい*****感想・評価等をお待ちしております。

演劇部（前書き）

トップバッターの桃蓮です。何だか私の小説のごとく突っ張りました。

でも、一生懸命書きましたのでどうぞご覧ください。

演劇部

……それは、小さな小さな高校の、夏休みの事だった。

夏期講習、高校の夏休みの第一関門。

そんな地獄のような夏期講習が終わりをづけ、号令と共にガタガタと”3年2組”と書かれた教室を去っていく生徒達。その中には、まだ教室に残って遊んでいたり、自習する者、先生に質問等をする者もいた。

そんな中の一人、黒髪を一つに結わえた少女が、学生用バックを持って教室を出た。この高校の制服である赤いリボンが、とてもよく似合っている少女である。

廊下に行く生徒達とすれ違い、追いつき、追い越され、時には先生に挨拶をし。少女は淡々と廊下を歩いていた。

少女の向かう先 それは少女自身の部屋だった。

少女の名は如月汀（おんづか）と言う。汀は今、自分の部活……演劇部の部屋に向かっているところだ。

汀はふと、ある教室の目の前で立ち止まった。そこには”資料室”と言う札に上書きされ、”演劇部室”と言う文字が、コンピュータで打ったようなとても綺麗な字で書いてあった。

「こんにちはー」

カラカラと引き戸を開け、能天気なソプラノの声で汀が言うと、奥からはアルトの低い声が聞こえた。

「……よ」

それだけ言って俯いた彼 訂正しよう、彼女の名は、高槻（たかつき）夕輝（ゆき）と言う。男子用の学校指定の服を着、頬杖をつけて奥の机に踏ん

振り返っている。

夕輝は何でも財閥の娘だそうで、彼女の権力におびえる先生たちが、” 此処では、俺、男だから ” と言う夕輝の宣言で男装を許した事は演劇部のみぞ知ることだ。つまり、彼女は学校上男である。

一回女として、汀が夕輝に ” 何で男装するの？ ” と聞いたところ、夕輝はしれっと ” 他校に居る彼氏が、俺に悪い虫がつくからって ” と言い放つて見せた。……汀はその時、夕輝は天然だ、と言う事を身を持って知った。

「夕輝、皆は？」

汀が荷物を降ろしながら聞くと、夕輝はさらりと言つてのけた。

「はア？ あのバカ共か？ どうせ補習か何かだろ」

鼻でせせら笑つた夕輝には、特有の妖艶な雰囲気が出ていた。そんな彼女が、この部活の部長なのだから訳無い。かく言う汀も、実質ほとんど部長のような副部長なのだが。

汀が苦笑していると、ドアの辺りから怒声が聞こえ、2組の男子生徒がやってきた。

「誰が補習だ誰が！ お前が補習じゃねエんなら俺たちも補習じゃねエよ！」

「噂をすれば」

夕輝がにやりと笑つた。怒声を放つた方の男子は少し舌打ちをし、荷物を降ろして真ん中の机に座る。

続いて入ってきた少年は、失礼しますと笑いながら荷物を降ろした。因みに、怒声を放つた方の男子は池田時雨、いけだ しぐれ 続いて入ってきた少年の方は皆瀬影である。かたせ かげ 時雨はある意味苦労人の演劇部のツッコミ担当、影は根っからのシヨタツ子だ。影は敬語を使うが、実は皆と同じ三年生である。

そう この演劇部は、今年三年生が卒業したら廃部になってしまう。と言うのも、演劇部に所属している6人が全員三年生だからである。

「おいそこのバカ、裕太と恵介は？」

「いきなりバカかよ、俺の人権は主張されねーのか」

「確か、さつきすれ違ったからもう少しで来ると思えますよ」

そうか、と夕輝がため息をついた。汀はふと、あとの二人 こぼ

林裕太と、守島恵介もりしまけいすけの事を思い出す。

(そういえば、今日は話があるから、早く来てね、って言ったんだけど……)

汀が首をかしげた瞬間、後ろの戸から長身の男子がやってきた。

……裕太である。

「こんにちは」

裕太はそう言つと、ずかずか中に入った。後ろから童顔の少年・恵介もやってきた。

二人が荷物を降ろしたのを尻目に、夕輝が二人に尋ねた。

「おー、何してた？」

その問いに裕太は、何の気も無く言う。

「補習」

そう言つて、真ん中の机に備えてある椅子に腰掛けた裕太と恵介に、時雨が尋ねた。

「お前ら抜け出してきたのか？」

「汀が、どうしても今日は用事があるからって」

「そうそう、話したい事がね」

裕太に指差され、にっこり笑った汀を尻目に、時雨は裕太と恵介にしっしっ、と手を振る。

「良いだる別に、補習終わってからも。こっちは発声とかして待つてっからよ。ほれ、行け」

「えー……。お前は生死別れの宣告を聞かずに補習せんじゅうに行けつて言うのか!？」

「しらねーよ! 何だよ生死別れの宣告つて、お前何しかした! てか、お前補習のルビをせんじゃないよにするな!」

時雨がいつものごとくつつこめば、裕太は何か思いついたように視線を時雨に向け、無表情に言い放った。

「つかよオ、そう言う時雨が出てきやいいんじゃね？」
「え？」

その裕太の言葉を不穏に感じた時雨は、嫌な予感がして堪らなかつた。……汀と、裕太が時雨を押し、奥の窓まで追い詰める。

そしてなんと、本気で窓の外に出した。

2階にある部室の窓にぶら下がっているので、時雨は窓枠につかまっている状態である。

「……裕太アアアア！ やめ、ちよ、中に入れてエエエエ！」

「じゃあ言ってみろ、部室に裕太様と恵介が来てよかつたですと、心からな」

裕太が黒い笑みを浮かべる。……備考だが裕太は生粋のDSである。この黒い笑みこそ、裕太が心から楽しんでる笑みなのだ。

「これ……っ、マジシヤレになんないって！ 裕太、か、勘弁して」
「10秒」

時雨に向かって冷ややかに言い放つ裕太に、時雨はゾクリと悪寒。

「……」

時雨は少し沈黙してから、早口で部室に裕太様と恵介が来てよかつたですと言い募る。毎日の光景だが、さすがに面白いそうである。

機転を聞かせた汀が、皆に呼び掛けた。

「ねー、皆、良いかな？」

「あ？」

「何ですか？」

全員（時雨以外）がこちらに向いた。すかさず時雨が見えないながらも必死に言ってくる。

「ちよ、この状態で話を始めるな！ 汀、助けて！」

「裕太、時雨中に入れてあげて」

汀が裕太に言い放つと、裕太は少し頬を膨らませた後、呟くように了承した。

「アイアイサー」

「た、たず、助かった……」

裕太に手を貸してもらいながら入ってきた時雨は涙目である。

「で、何？」

恵介が汀に言ってきた。少し夕輝に目配せすると、お前が言えと目で言われた。一応女同士、と言う事で以心伝心が出来る程仲が良いのだ。

「実はね……」

汀は改まって口火を切った。

演劇部（後書き）

次は逆さまの蝶様、
お願いします。

演劇祭と言つ名の目標（前書き）

今回は私、逆さまの蝶が書かせて頂きました。

こつ言つた小説を書くのは初めてなので、うまく書けているか少し不安ですが、どうか末長くお付き合いくださいませ。

演劇祭と言つ名の目標

「演劇祭？」

汀の言った一言が理解できずに、夕輝以外全員がぼかんとした表情をして聞き返した。

「そう。演劇祭。私達それに参加しようと思ってるんだ。ほら。去年までは部員の人数が少なすぎて、学校の中でしか発表できなかったでしょ？ 今年は人数がある程度揃ったから、ぜひ参加してみようと思つて……あれ？」

一人意気込んで話す汀とは対照的に、彼女以外誰一人として反応を見せない。まるで時が停止してしまったかのように、彼らはまったく動いていないのだ。

「えっと……。私、何か分からないことでも言つたかな？」

「それはつまり、俺達が学校よりももっと大きな場所で、たくさんの人に俺達の演技を見てもらえるってことだよな？」

裕太の何気ない発言が、停止していた時を元に戻す。

「そう言うことだけど？」

汀がそう言うや否や、今までの時間停止が嘘のように演劇部員全員が飛び跳ねた。耐震強度が弱い校舎なので、飛び跳ねたことにより軽い地震が起こる。

しかし彼らは、そんなことは気にも留めずに、目をキラキラさせながら歓喜の声を上げた。

「マジで！？ 俺達ついにそこまで有名になつちまったのかよ！

演劇やつてて良かった！」

「演劇祭 つてことはそれなりに有名な劇団もやってきましたね」

「つてことは、俺達その劇団の人達と肩を並べたつてことだよな？」

汀を置いてきぼりにしながら、彼らは勝手に話を進めていく。まだ、彼女は自分の言いたいことの半分も言っていないと言うのに。汀は自分の話を最後まで聞いてもらうために、自身の澄んだソプラノを使おうとした。

「ちよつと皆　！」

「落ち着けバカ共！　お前ら浮かれ過ぎだ！　これは言い換えれば、他の連中に恥じぬような演技を俺達がしなければならぬと言うことだ！　少しは自覚しろ！」

夕輝に一喝され、冷水を浴びせられたかのように部員達が静まり返る。

まさに鶴の一声。さすがは演劇部部长と言ったところである。普段あまり働いていないのが欠点だが……。

汀が夕輝にありがとうと言う意味を込めた視線を送った。夕輝は代わりにどう致しましてと言う視線を返す。

「さつきも言ったように、私はこの演劇祭に出ようと思っているのだけど、私達はその演劇祭に向けてやらないといけないことがたくさんあると思うの。だから、これからいつも以上に厳しい練習をしなければいけないと思うけど、皆いいかな？」

彼女は必死の表情をしながら、部員達に訴えかける。彼女の表情からは、どうしてもこの演劇祭に参加したいと言う熱意が見て取れた。

しかし、先ほどの熱気が嘘のように再び沈黙する部員達。時間がけが刻一刻と過ぎていく。

「いいんじゃないか」

最初に沈黙を破ったのは恵介。

先ほどからあまりしゃべっていなかったため分かりづらかったが、彼の声には妙な深みがある。

「さすがに部長命令じゃ仕方がないな」

恵介に続き、裕太も少し芝居のかかったようにしゃべり出す。

「部長は夕輝だろ！？ でもまあ、汀にはさつき助けてもらったし、俺も別にいいぜ」

相変わらず裕太にツッコミを入れながら、汀の意見に賛同の意を示す時雨。

「皆さんがそう言うなら、僕は何も言いません」

童顔の影も文句なしと言った表情をしながら汀の意見を受け入れた。「だそうだ。良かったな、汀」

夕輝が汀に綺麗なアルトの声で言う。汀に笑いかけた夕輝の表情は、老若男女問わずに安心感を与えるものであった。

「うん！ ありがとう皆！」

汀は満面の笑みで部員の皆にお礼を言った。

この演劇祭には、実は誰よりも汀が参加したかったのだ。

今年の夏は、彼ら演劇部にとって高校生活最後の夏。汀が演劇祭に参加しようと思ったのは、高校生活最後の夏で絶対に悔いが残らないようにしたいと言う願いによるものだった。

「じゃあ皆！ 今日も張り切って練習しよう！」

汀が演劇部員達に呼びかける。

「オー！」

全員が一団となり、彼らは演劇祭と言う目標に向けて動き出した。

「それじゃあ、最初はいつも通り、発声練習からしようぜ」

そう言い出したのは、裕太である。

彼がいつもより張り切って見えるのは、彼もまた、演劇祭に出ることを楽しみにしているからと言うことに他ならない。

しかし、彼の前に一人の男が立ち塞がった。その男とは 時雨である。

「ん？ どうした時雨？」

裕太が不思議そうな顔をしながら尋ねる。

「裕太達は練習の前に補習に戻りな。俺達はここで先に練習してるから。ほら。行った、行った」

時雨はそう言うのと、さっきと同じように裕太と恵介にしっしと手

を振る。

「お前は俺に死ぬと言うのか？ 何て薄情な奴なんだ！」

裕太はやたら大げさに言った後、おうおうと嘔泣きを試みせる。あまりに分かりやすい大根芝居に、時雨はふうと大きくため息をつく。

「補習ぐらいで死ぬ訳ないだろ！ いや むしろ、裕太は死んでくれたほうがいいのか……？」

ツツコミを入れた後に、一人納得しながらそんなことを言う時雨。裕太は時雨の台詞セリフを聞くと、すうっと目を細めた。

「時雨……お前、また窓の外に放り出されたいようだな？」

裕太は目を細め、腹黒い笑みを浮かべながら、時雨にじりじりと詰め寄り始めた。時雨は逃げ場をなくして、窓の方へと追いやられる。

「汀アア！ 裕太をどうにかしてくれええ！」

見れば、時雨が二階の窓から外に放り出されそうになっていた。先ほどと寸分違わぬ、まったく同じ光景である。

「汀。俺は少し不安になってきたんだが……」

夕輝に言われ、汀もほんの少しだけ不安になった。

演劇祭と言つ名の目標（後書き）

ご読了ありがとうございました。

次は、ブラックジャックBJ様が書かれます。

これからの一日（前書き）

はじめまして……かな？

BJです

『さあ、花道に立ちましよう』が始まって三話目！

今回はわたくしBJがお送り致しますわ。

皆さんご機嫌ようですわ。

わたくしの作品を見て下さな、

『』が途中にあるんですが『』の意味は五人以上が同時に喋った風景を表しています。

了了承下さい。

これからの一日

「終わったー」

裕太が演劇部の部室の扉を開けながら補習が終わった事を告げる。裕太の後ろには恵介もいるという事は恵介も補習が終わった事を意味する。

「……お疲れー」

時雨以外の夕輝、汀、彰の声が八毛る。

「本当だろうな」

時雨が疑いの眼差しを裕太、恵介に向ける。

……が、肝心な裕太と恵介は他の皆とわいわい談笑していた。

「……」

それを時雨が寂しそうな顔で眺めている。

夕輝と汀がアイコンタクトで少し会話をした後、

「……それでは！」

汀が勢いよく立ち上がって皆を見回してから息を深く吸って……
思いつ切り吐いた。

「……練習しようー！」

今日の練習は終わり皆は下校の準備に取り掛かっていた。

皆疲れて無言だった部室に時雨が大きな声で沈黙を破る。

「やっぱり目標があると違うなあ！」

「……」

普段だったらここで「うるさい、落とすぞ」「みたいな返しをするのだが皆無言で肯定の意を示す。

皆はそれぞれ帰路に着いている。
帰る道のりは違うが皆はただ沈黙を守る。

……最後の演劇祭の事を考えながら……

これからの一日（後書き）

どうでしたか？

感想・評価・質問・意見等もお待ちしておりますわ。

次は、桃蓮様です。

まじろ〜

台本（前書き）

桃蓮です。ちょっと短いでもです……。

余談ですが、作中に出てくる裏方と言うのは役がない、照明や音響をやる人の事です。そして、ピンスポと言うのはピンスポットの事。舞台上の人物一人は照明側から照らし、丸く灯りをつける……みたいな感じですよ。ピンスポは専門の裏方が一人いないとできません。

では、「さあ、花道に立ちましょう」「お楽しみください。

台本

「……なあ、台本、そろそろ決めた方が良くね？」

いつものように腹筋をしていた一同に、時雨が声をかけた。

時雨は元々運動神経がいいので、恵介や影、それに汀のような運動オンの遅い腹筋が終わるのを待っていたのだ。

「……台本か」

ワイシャツを第2ボタンまで外した夕輝が呟いた。ちなみに、かなりエロい。いつもは胸を隠すためにサラシを巻いている夕輝だが、演劇部にいるときだけはサラシを外しているのである。まあ、本来も汀に比べたら小さいは小さいが、やっぱり夕輝特有の色気をまとっており、かなりの色気が出ている。と言ってもそれが日常茶飯事と化した演劇部は、そんな夕輝もスルーだ。

「でもあれ、ピンスポとか使っちゃダメだろ？ 照明と音響だけじゃねえと。……って言っても、最低限頑張ったとして、役は四人だな」

裕太が指をおりながら言う。

裏方は最低二人にしなければ人員問題がかかせられてしまう。四人でも少ないのに、汀は頭を抱えた。

そうしていると、彰が口を開いた。

「そうしたら創作台本とかどうですか？……僕、お話作るのなら得意ですよ」

「あつ、それいいな、創作台本！」

影の案に恵介が同意した。汀も頷き、皆同意を示した。が、夕輝だけがふと、胡坐をかきながら言う。

「でも、創作台本つつても、四人はきついだらう」

夕輝が頭を抱えた。そうだよな、とまたしても沈黙が部室に響いた。

途端、汀がふと言った。

「監禁もの……」

「は？」

「物騒な事をいきなり言うな！」

夕輝が振り返り、時雨は汀につっこんだ。汀は手を合わせて言った。

「そくだよっ！ 一空間に閉じ込められた四人がいれば、部外者は入ってこないよ！ そして、四人の中に犯人が居れば完璧！」

汀がキラキラした目で同意を求める。啞然とする他のメンバーの中で、裕太はそくだな、と頷いた。

「じゃあ推理物？ 影、書けるか？」

「誰かが宿題をやってくれば明日までには」

影がいたずらっぽく笑った。それに一瞬凍りつく一同だが、すぐに影のかばんをあさり始めたのだった。

台本（後書き）

次は逆さまの蝶様です。

宿題（前書き）

どうも皆様方。逆さまの蝶です。

私も短くなってしまいました。ご了承ください。

宿題

「さて。問題は誰が影の宿題をやるかと言うことだが……」

夕輝がそう言って部員のメンバーを一瞥した。部員達は全員、夕輝から視線をそらすようにしている。

「誰か率先してやろうと思う奴はいないか？」

夕輝は綺麗なアルトの声を使って部員達に呼びかけるが、誰も手を挙げようとはしない。彼女自身も内心では手を挙げる部員はいないだろうと思っていた。

何しろこの面子の半分は補習送りになった連中である。影を除外すると、時雨と彼女以外補習にならなかったメンバーはいないのだ。

汀、裕太、恵介の三人は自分達のことだけで手一杯に違いない。自分を犠牲にして時雨の宿題をするのであればできなくはないだろうが、彼らはキリストではないのでそんなことはしないだろう。となると、この宿題は彼女と時雨で分担してやるしかないということになるが……。

「はい」

半ば諦めていた夕輝の耳に、ソプラノの声が聞こえてきた。

なんと、汀が一人だけ手を挙げていたのだ。

「マジかよ！ できんのか汀!？」

今まで黙っていた裕太が目を丸くして言った。

それはそうだろう。一緒に補習リハビリから帰還した戦友が、今度は宿題宿題をしなくてはならなくなるかもしれないのだから。

「早まるな汀！ お前の頭じゃ無理だ！」

このままでは無駄死にするだけだと裕太は止めるが、汀は首を横

に振った。

「聞いて裕太。私、どうしてもこの演劇を成功させたいの。これは私の我俣のようなものなの。だから私はこれ以上皆に迷惑をかける訳にはいかない」

汀のその言葉を聞くと夕輝は頬を綻ばせた。それと彼女の格好とが相まって、彼女からコケティッシュさが醸し出される。しかし、もったいないことに、部員達はその光景に目を向けることはない。「よし分かった。俺と時雨と汀で影の宿題をすることにする」

時雨の了解も取らないまま、夕輝が勝手に決めてしまった。

「ちよつと待つてくれ夕輝！俺は影の宿題を手伝うなんて一言も言っていないぞ！」

さすがに時雨もそれには驚き、慌てて夕輝に訂正するよう呼びかける。

それを聞いた夕輝は、眉間に皺しわを作つて少し不快そうな顔をした。「ああ？時雨、お前部長命令が聞けないのか？」

顔にあまり出ていなかっただけで、相当不快だったらしい。

「……はい。喜んでやらせていただきます」

夕輝の一言に、時雨はあっけなく折れた。

いつもの彼なら「こんな時だけ部長命令かよ！」と言っていたことだろう。

しかし、夕輝の持っているアルトをこう言う場面で使うと、彼女の恐ろしさが倍になるため非常に断りづらくなるのだ。

「それじゃあ影。お前の宿題は俺達がやるから、必ず明日までに台本を完成してきてくれよ」

「はい。任せてください」

夕輝の言葉に影は胸を張つて返した。

こうして、演劇祭に向けての彼らの活動が本格的に動き出したのである。

宿題（後書き）

次はB J様が書かれます。
ブロックジャック

喜び（前書き）

今回は私B Jがお送り致します。

喜び

演劇祭への日にちが確実に近いていく。
それと共に皆の演技力も成長していく事はなく。
皆、宿題を影は台本作りをひたすらしていた。

「できました！」

『おおっ！』

日にちが変わり影から吉報が訪れ、皆歡喜の声をあげる。

影の手には台本であるう冊子が持たれていた。

皆我先にと影に押し寄せる。

もちろん。影と共に喜びを分かち合う為ではなく台本を見る為である。

「見せる！ 俺が先だ！」 時雨が皆の代弁しながら影に詰め寄る。

「うるさいっ！ バカども」

夕輝が一喝すると皆が驚いて静かになった。

「まず、部長である俺からに決まってるだろ」

「結局お前も先に読みたいんじゃないやねえか！」

時雨が夕輝に言うが軽くあしらわれた。

「ほら、俺が先だ」

夕輝が手を前に出して”くれ”と渡す様にジェスチャーする。

「させるかっ！ 俺が先だ！」

「今まで台本に食いついてなかったのになんで今回はそんなに食いつくだよ！」

「今回で全てが決まるからだよ！」

時雨と夕輝がまた、抗争を始める。

「あ、あの一！」

今度は影だった。

影は皆を見回してから皆に聞こえる様にさつき皆を静かにさせた声とは比較的低い声で言った。

「皆で見ればいいんじゃないでしょうか？」

『……………』

そんな事は皆わかっているんだが口に出せない空気だから皆、影に頷いて肯定の意を表す。

「お前そこ邪魔だ！」

とか

「早くページをめくれ！」

一向に静かになる気配が出せない面子メンツであつた……

皆同時に読み終わるとそれぞれ宛てられた席に着く。

暫く沈黙になって深いため息を吐いた。

影は少し不安で皆を一瞥する。

『……………別に良いんじゃないか？』

皆の声で影は皆に気づかれない様に小さくガッツポーズを決めて静かに喜んだ。

まあ、皆それは目に入ったんだけどな。

中には影を見て笑う者も居た。

「それじゃあ早速始めましょうか？」

汀の発言に”やるか”とテンションを上げて練習を始めた。

喜び（後書き）

次は桃蓮様です。

よろしくお願いします

配役（前書き）

桃蓮です。台本内容を勝手に決めましたがご了承ください。（^

^ ;

では、”さあ、花道に立ちましょう”お楽しみください。

配役

ここで、台本のあらすじを説明しよう。

舞台は暗い部屋。主人公、藤中^{ふしなか}は、目が覚めたら知らない者達と閉じ込められていた。何処までも軽いノリの黒崎^{くろさき}。冷静に皆をまとめようとする山岡^{やまおか}。パニックに陥ってあたふたしている川神^{かわかみ}。とりあえず自己紹介でもしようか、と藤中が言い、こんなになるまでの経路を話し始める四人。だが、いつまでたっても誰も来ないし居る気配がない。不審に思った藤中が部屋を歩き回り、ふと、階段を見ると、そこには赤く”呪ってやる”の文字。そこからぎくしゃくし始めた四人に追い打ちをかけるように、此処に来る条件が揃っていた。条件とは、“桜田中学校”と関わっている事、そして、いじめられて死んでしまった少女と関わっていると言う事。山岡はその少女をクラス担任だった。川神は少女を裏切っていたいじめた張本人にくらがえた。そう、藤中がその少女の姉であり、黒崎はその少女の他校の彼氏だったのだ。少女はいじめた張本人たちはすでに殺してしまった藤中と黒崎は、彼らに罪をかぶせて殺すつもりだったのだ。結局藤中と黒崎は川神と山岡を殺し、その場を去って行ってしまった……。

「で？」

図書室でコピーしそれぞれの手元に渡った台本を片手に、夕輝が皆に問う。

「で……って？」

その問いの意味が理解できず、顔を上げる汀に、夕輝が言った。

「配役と裏方だよ」

よっこいしょ、と立ち上がり夕輝は皆の居る机に歩み寄った。

「オーディションか？」

「時間がねエ。立候補で」

それに答えたのは裕太だ。夕輝がそれで良いか問うように皆に目配せした。異論がある者はいないらしい。皆静かに頷いていた。

「よし、異論はねエな。じゃあまず音響！」

と言いつつ音響は決まっているようなもので、皆影の方を向いていた。案の定、手を挙げたのは影である。彼は音楽的センスに優れており、それで台本を手掛ける事が出来る。

「音響、影な」

「アイアイサー」

そうしてにつこり笑う彼を可愛いと思ったのは汀だけではないだろう。

「次、証明」

夕輝がルーズリーフに綺麗なコンピュータのような字で記録していく（札の字を書いたのも夕輝である）。と、恵介がおずおずと手を挙げた。

「証明、恵介……つと」

「出来んのかお前に？」

「大丈夫、俺は出来る、成せばなる。きっと出来る」

「暗示をかけるな、心配になる！」

そうつっこまれつつ、恵介は結構手先が器用だ。センスも並にはある。確かに適任と言えば適任である。

「で、……まず配役を確認。藤中ふしなか 女、黒崎くろさき 男、山岡やまおか 男、川神かわかみ

女

「部長、女二人いるけど？」

にやりと裕太が笑う。その笑みに顔を引きつらせ、夕輝は舌打ちをして言った。

「女は……俺がやる！」

おおおおー、と歓声上がる周囲に夕輝は顔を真っ赤になって黙れと言ひ募った。

「じゃあ藤中！ 立候補！」

夕輝が叫ぶように言う。シンとした部室で、汀が手を挙げた。それを見た皆は仰天したようにうめき声やらをあげた。

「ええええええええええええ！？」

「え、あつてない……かな？」

「違くて！ ゆ、夕輝が川神！」

あははははは、とバカ笑いする裕太を夕輝は思いつきりとび蹴りした。吹っ飛んだ裕太にすっきりしたのか、夕輝はシャーペンを力チカチと押すと、またルーズリーフに書き始めた。

「藤中が汀、川神が俺、な……。よし。じゃあ黒崎！」

夕輝がさわやかに言い放って見せた。そこは時雨が手を挙げる。

「えー時雨ー？」

恵介が露骨に嫌な顔をして言った。実にムカつく顔だ。

「俺が山岡の方が変だろ……」

「確かに」

夕輝は妙に納得し、”黒崎 時雨、山岡 裕太”と書いた。

「俺山岡かよ……」

「言いじゃん眼鏡鬼畜」

ぼん、と恵介がいたずらっぽく笑いながら裕太の肩に手を置いた。

「じゃ、読み合わせから行こうか」

汀が座り直して笑って見せた。

配役（後書き）

次は逆さまの蝶様です。

読み合わせ（前書き）

どうも皆様。逆さまの蝶です。

最初に台詞セリフの一部を勝手に作ってしまったことをお詫びいたします。

後、台本の台詞セリフのところだけを『』にしておきました。ご了承ください。
さい。

読み合わせ

『ここは どこかしら？ 私昨日、自分の部屋のベッドで寝たはずなのに……』

手探りで電気のスイッチを探す素振りをする汀。彼女は既に役作りを始めているようである。

『ねえ！ 誰かそこにいるの！？ いるなら返事をして！』

夕輝は、普段のアルトとは違い、独特の雰囲気を持った可愛らしい女の子の声を使って台本を読む。

夕輝の普段は見れない一面を見て、皆が呆気に取られたような表情をした。

「ん？ どうした？ 何かおかしかったか？」

台本を見直して、首を傾げながら普段のアルトで皆に尋ねる夕輝。『皆さん冷静に！ その場を動かさないください！ 下手に動く危険です！』

その言葉を聞いて我に返った裕太が言葉を続けた。

DS眼鏡男の耳慣れない敬語を聞いて、時雨はほうつと感嘆の吐息を漏らす。

「裕太も今みたいに敬語を使っていれば、優等生に見えるのにな」

「そんなことは良いから、お前早く次の台詞セリフ言えよ！」

裕太は顔を茹蛸ゆでたこのように真っ赤にしながら、時雨に催促をした。彼自身も相当恥ずかしいと思っているようだ。

『つつても、真っ暗なんだし動いてみないと何も始まらないじゃん』
と言って時雨はゆっくりと辺りを見回す。周りには彼らが普段目にしてるものしか置いていないと言うのに、彼の動作を見ると、本当に密閉された空間にいるのでは？ と錯覚させられる。

『ですから！ 動き回ると我々とはぐれてしまう可能性だって

！』
『硬いことを言うなって。俺達は何かしらの理由でここに………
言うなれば運命共同体なんだからよ』

と言つて時雨はイタズラっぽくニイと笑う。どこか影のある彼の姿は、犯人としての貫禄を十分に見せ付けていた。

『……つと、何かスイッチみたいなのを発見したぞ！ 見ろ！ だから動いた方が良かったんだ』

『待つて！ こんな訳の分らないところでスイッチを押すの！？ 私達死んじやったりしないわよね！？』

多少パニックになりながら話す夕輝。先ほどと同様にいつものアルトは封印されている。

『映画の見過ぎだつて。ほれ………』
台本通りにスイッチを入れる動作をする時雨。

汀、裕太、夕輝が自分の右手で顔を覆った後につつすらと目を細める。

『電気をつけたのにそんなに明るくならねえな。電気が切れ掛かっているみたいだ』

『やっぱりここ……私の部屋じゃないんだ………』

汀は少しだけ疲れきつたように言った。自分の家じゃないと頭が納得していても、自分の感情が納得していなかったと言う状況をうまく表現できている。

『ここどこなの！ 今すぐ私をおうちに帰して！』
夕輝がパニックになりながら、今にも泣き出しそうな声で言う。

『落ち着いてください。取りあえず皆さん冷静になりましょう。昨日のことを思い出せば、何か分かるかもしれません』

『昨日のことつて。確か……私はいつも通りコンビニでバイトを終えた後に……うちに帰る途中で記憶がなくなってるんだけど』

夕輝は自分の髪をとかすしぐさをしながら、記憶を辿るように話す。その姿は非常に艶っぽく、彼女を見慣れていない男子がいれば、

間違はなく見惚れてしまうほどの美しさを放っていた。

『なるほど。つまりその間に誰かに襲われた可能性が高いということですね。実は私も仕事を終えて家に帰る途中で記憶がなくなっていますね。貴方達もそんな感じでしょうか？』

裕太は台本から目を離し、汀と時雨に顔を向けた。

『ええ。まあ』

顔を下に向けて、歯切れが悪い答え方をする汀。

『確かにそんな感じだった気がするな』

時雨は視線を右上に向けて、腕を組みながら答える。

『どうやら私達を襲ったのは同一犯のようですね。犯行の手口も似ていますし』

『そんな……！ 私に何の恨みがあってこんなことするのよ！？』

『前世の恨みとかだったりしてな！ こ、この恨み……晴らさでおくべきか……とか。はははは！』

『ふざけないで！ 何でこんな状況でそんな能天気でいられるのよ！信じられない！』

そんな彼らを尻目に、汀は一人で部屋の中を歩き周り始めた。

『おかしいわ。本当に犯人がいるとしたら、襲った私達だけをここに残して姿を現さないなんて絶対におかしい。一体どうなってるの……？』

そうぶつぶつ呟きながら、歩き回る素振りを見せると、ふと足を止めた。

ある一点を凝視したかと思うと、見る見る彼女の顔が驚愕の表情へと変化していく。

『きゃあああああああああ！』

汀の澄んだソプラノによる悲鳴。

言い争いをしていた裕太、時雨、夕輝が一斉に汀の方へと顔を向ける。

「うるさい！」

彼らが顔を向けると同時に、誰かが勢いよく演劇部の部室のドアを開けた。

何事かと演劇部のメンバー全員が、今度は開いたドアの方へと体を向けた。

演劇部の部室に勢いよく入ってきたのは、科学部の部長。演劇部の部室の隣には、科学部の部室があったのだ。

「君達うるさすぎ！ もっと声のボリュームを下げて欲しい！ できないと気が散って試験管もろくに扱えない！ 少しは周りのことも考えてくれ！」

彼は一方的に演劇部の部員達をしかりつけると、部室のドアを閉めて静かに立ち去って行った。

「あゝあ。良いところだったのに興が醒めちまったな」

科学部の部長が立ち去った後に残念そうにぼやく時雨。

「でも私達、結構うまくできてたよね？」

汀は先ほどとは打って変わって、小さな声で皆に確認をする。

「そうそう。中でも夕輝が……」

あははははと腹を抱えて笑い出す裕太に、先ほどと同じように夕輝の飛び蹴りが直撃する。

「まあ。あのバカは放っておいて、このまま続きをやるうか。ただし、科学部の連中の邪魔にならない程度の声を出しつつな」

床に倒れている裕太を完全に無視して、夕輝は汀と時雨に指示を出した。

「分かった。それじゃあ、さっきの続きから行こう！」

汀と夕輝と時雨は再び台本の方へと顔を向けた。

読み合わせ（後書き）

ご読了ありがとうございました。

次は、ブラックジャックBJ様が書かれます。

謎（前書き）

お久しぶりです。

B Jです。

すみません。

私も勝手に話し作ってしまいました……かな？

台本通りですけどね。

（ ）

では、よろしく願いします。

（ ）

謎

『きゃあああああああああ！』

汀の澄んだソプラノによる悲鳴。

言い争いをしていた裕太、時雨、夕輝が一齐に汀の方へと顔を向ける。

汀が目を向けた先には階段が……

そこには赤く ” 呪ってやる ” の文字。

『お、おい。何だよあれ！』

時雨が震えた指を少しずつ動かしながら赤い文字を指差す。

『……っ！』

皆が目開いたと思ったら皆の悲鳴の音が合わさる。

あれからしばらくして少し落ち着いた頃。

落ち着いたと言っても皆震えていた。

自分達の状況を少し理解したのだ。

でも不安は積もるばかり、一向に明ける気配がない。

むしろ閉じてしまったかにも思えた。

中には頭を抱え何かをぶつぶつ呟いている夕輝も居た。

汀は恐怖に包まれて辺りを何度も見回す。

『……どういう事か……説明してください！』

裕太が声を上げるが誰も何も答えない。

むしろその声が引き金になって裕太と同じ質問が飛び交う。

皆、冷静では居られなかった。

またしばらくして普通に話せるくらいに落ち着いた頃。

汀がふと、こんな事を口にした。

『……誰かに恨まれる様な事をしてない？ いえ、しているはずで

す。だから私達は……ここに連れられて来たんですから』

そこから皆は言葉を出し合った。

相手さえわかったから……と言っても無駄だろうという事はわかっていた。

彼らは今この状況を知る為に話し合っていた。

逃げるにもどうするにも状況整理が大事だと皆理解していた。

話し合っていると彼らにはある共通点が出て来た。

それは ” 桜田中学校 ” と関わっている事。

そして、いじめられて死んでしまった少女と関わっていた事だった。

謎（後書き）

次は桃蓮様です。

よろしくお願いします。

（^o^）／

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2084j/>

さあ、花道に立ちましょう

2010年10月30日21時28分発行